

## スマトラ島沖津波支援「タイ・スタディツアー」の考察

スマトラ沖津波「タイ・スタディツアー」は、活動にあたって協力を得ていたタイのNGO「チルドレンファンデーション」が支援地タブタウン村から撤退したことに伴い、2007年度をもって活動を終了し、2008年度はこれまで3年間の活動のまとめと考察をおこなうこととした。総括の作業として、3年間の被災地の変化、現地での活動、タイ・スタディツアーから生まれたもの、次回への課題を考察、分析するワークショップを筆者と参加学生<sup>1</sup>とでおこなった。一方、筆者は参加学生へのインタビューを通してタイ・スタディツアーへの参加による学びと成長を整理した。これらの総括作業のまとめとして、報告書「3年間の『タイ・スタディツアー』を振り返って」が今年度中に発行される予定である。

ここでは総括作業を通して、明らかになった「タイ・スタディツアー」の意義と残された課題を簡単に記したい。被災地タイでは、学生たちはタイ政府から支援が届きづらい少数民族モーケンの集住地域で、津波とその後の混乱から生じている精神的な負担が緩和されることを目的として、子どもたちとの交流と遊びの活動に取り組んだ。年に1回であっても3年間継続的に活動を続けたことにより、村の子どもたちとの信頼関係が築かれ、住民たちは学生の訪問を待ち望んでくれるようになった。一方、本学の協定校であるタマサート大学では、本学の学生たちが日本の地震や津波への取り組みについての報告をおこなった。学生たちは災害支援の専門家ではないが、子どもたちと年齢が近いことを生かした遊びのボランティアは文化や言葉の壁を超えやすいこと、自分たちの知っている初歩的な地震や津波への備えの知識や経験を伝えることであっても、タイ社会に役立つことが分かった。

参加学生たちは、タイでの経験をボランティア活動やゼミでの研究、進路選択に生かしていった。例えば、スマトラ沖津波と新潟県中越地震の両方の被災地へ赴き、活動をおこなった学生たちは、2004年12月と2007年7月の2度の地震で打撃を受けた新潟県中越地域の人たちを音楽によって元気づけたいと考え、明学生やタマサート大学からの留学生によびかけて、2007年12月にコンサートを開催し、復興の困難に立ち向かう人々を応援した。タイでコミュニティづくりの重要性を学び、まちづくりの研究をおこなうゼミで勉強を重ねて大学院進学を目指している学生もいる。タイで子どもたちが食べ物を喜ぶ姿を見て、食品会社への就職を決めた学生もいる。

このように意義があった一方、課題もある。遊びの準備が不十分だった為に、現地で失敗してしまった場面があったこと、タイでの活動後に現地に行った学生だからこそ気づく視点を発展させた、息の長い活動づくりまで至らなかったことは、改善すべき点として捉えている。現在の段階ではタイや災害被災地での活動は具体的に予定されていないが、将来的には津波被災地での経験やタイとの人的つながりを生かした活動が展開できるよう、引き続き努力をしていきたい。(糸井)

---

<sup>1</sup>学生の半数近くは大学を卒業していたので、在校生とワークショップをおこなった。卒業生については、適宜コーディネーターや在学生がヒアリング等をして協力を得た。